

## 音楽部会

### 県研究主題

多様な音楽活動を通して音楽文化の理解を深め、音楽を愛好する心情や豊かな感性、音楽的な能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

### 提案 1

提案者 城所 純子（県央地区）

### <研究主題>

生徒一人ひとりの感性を生かし、イメージや曲想を大切にした創作活動

#### 1 提案内容

イメージや場面にあったソネットを用いて、そのイメージに合う8小節の器楽曲の旋律づくりを行う、3時間構成で学習の展開を工夫した3年生の授業実践。個人活動とグループ活動が互いに影響し合えるような場面設定をし、「生徒一人ひとりの感性」をより生かせるように工夫した。

#### (1) 研究内容

##### ① 創作活動・3年間指導計画

創作活動を行うには、記譜や読譜・音楽の構成の理解等、多くの力を身につけさせる必要がある。そこで、3年間を通じて創作の力を育む「3年間」の指導計画を立て、活動を実践してきた。

1年次…「赤とんぼ」から言葉と抑揚を学ばせ、言葉の持つリズム（ふし）を活かして2小節のリズム譜の創作。

2年次…言葉から抑揚やリズムを引き出し、和音に当てはめて、4小節の曲を創作。

3年次（25年度）…ソネットから、8小節の器楽曲の創作。

聴音と写譜も年間を通して授業の中に組み入れた。

##### ② 授業の実際（3学年）

学習指導要領にも示されているように、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を通して、音楽を創作する楽しさや喜びを味わわせることを目標とした。

##### ○ 実践上の工夫

- ・3時間構成の「創作」題材づくり（学習指導要領の第2・3学年内容（3）イの具体化）
- ・構成の工夫（反復・変化・対照）や全体のまとまりを促すワークシートの工夫・改善
- ・感性、イメージ、曲想をみとる評価のてだて

#### (2) 成果と課題

生徒の多くが、おもしろい旋律やきれいな旋律を作ろうと、創作活動に意欲的に取り組んでいた。3時間では、曲を完成することができない生徒もいたが、ワークシートの中に説明を入れるなどして、提示のし方を工夫することによって、創作活動の時間が確保できた。教師が示

す例となる旋律が、苦手な生徒へのてがかりになったが、四分音符中心の単純な例を、そのまま取り入れていた生徒も多く見られた。生徒の作品の中には、テーマやソネットと創作した曲が合っていないものもあった。自分の曲と見合って推敲する時間が欲しかった。

評価については、教師の主観が入らないよう、①生徒のイメージした曲想やソネットをどのように音楽で表すかについての工夫が明確に記してあるか（音楽表現の創意工夫）、②それらと「作品」から読み取ることができる内容とが整合しているか（音楽表現の技能）、③「反復・変化・対照」などの構成を工夫してそれを楽譜に書き表しているか（音楽表現の技能）等、ワークシートと発表から見とれるように努力した。

3年間の集大成として位置づけた今回の創作活動から、生徒一人ひとりの新しい良さや能力を発見することができた。生徒一人一人の作品を丁寧に見るには、一人教科の音楽科にとって時間の確保が必須。他の活動と組み合わせるなど指導計画や手立ての工夫を考えていきたい。

## 2 研究協議内容

### (1) 3年間を見通した指導の大切さ

小学校でどのような音楽教育が行われてきたか、学校によってバラつきがある。1年次は生徒一人ひとりがどの程度の知識をもっているのか把握するために、アンケートを取ることも有効だ。小学校との連携を考え、小学校で得てきたものが中学校でより定着していくように心がける必要がある。毎時間少しずつ継続的に取り組むような課題（例えば聴音など）を設定し、3年間を通して着実に音楽的な力がつくように指導していくとよい。

### (2) グループ編成について

今回は発表をグループ内で行ったが、グループにすることで「教え合う」環境ができることは素晴らしいこと。話し合い活動等では、4人程度の人数が適当とされているが、今回の題材の場合、お互いの情報量を考えると、6人編成が妥当だと考えられる。

### (3) 評価について

実際の発表と、記譜の内容が合っているかを点数化する。1小節単位で点数化することも可能。表現の技能と創る技能をきちんと分けて考え、何を教えるか明確にしていく。教科の特性上、学校に音楽科が一人しかいない場合が多いが、評価の方法についてもっと協議をする場を設けると、客観的で根拠のある評価ができるようになる。基準を明確にし、きちんと説明できることが重要である。

## 3 助言・まとめ

今回の提案は、1年次から3年間を見通して指導してきた教科計画のひとつの成果である。生徒が最終的に曲を完成させて達成感を得るために、1時間ごとの目標を明確にすることが必要である。教師が見通しを立て、手立てを工夫することで生徒は安心して毎時間の授業に取り組むことができる。本題材で反復や構成などの共通事項を扱うことが出来る。題材設定をする際には必ず共通事項との関連を考えることが大切だ。記譜だけでなく、録音などをして生徒の記録を残すことで、生徒の意欲向上につながる。教師は生徒全員が達成感をもつための手立てを考えて、音楽科の指導目標を達成していくことが大切である。

## ＜研究主題＞

曲種に応じた発声や表現を工夫し、思いや意図をもって歌唱表現する生徒の育成

## 1 提案内容

横須賀市では、平成21年度より「曲種に応じた発声」、特に我が国の伝統的な歌唱についての授業研究を進めてきた。従来通り鑑賞に終始するのではなく、実際に歌唱表現として扱うために、どのような授業展開ができるのかという課題に向き合ってきた。

平成24年度の学習指導要領完全実施を機に、これまでの取り組みを踏まえ、思考力・判断力・表現力の伸長を図ることを目標とした。その一環として、伝統的な文化の歌に触れさせ、その歌に込められた思いを共有し、表現することができる生徒の育成を目指した授業を実施した。そこから見えた成果と今後の課題について提案を行った。

## (1) 実践上の工夫

総合的な学習の時間や修学旅行で、能のゼミや鑑賞を行っていることから、能「船弁慶」を教材に、ツヨ吟・ヨワ吟の表現を感じ取らせ、場面にあった謡い方を学ばせた。

- 1 時間目・・・能の特徴に気づかせる。(①面 ②装束 ③舞台 ④楽器 ⑤声 ⑥動き)  
→グループで①～⑥のテーマを一つ選択させ、発見したことや疑問点をまとめ発表させる。
- 2 時間目・・・謡の特徴を捉えた歌唱表現を工夫させる。  
→ツヨ吟とヨワ吟のグループに分け、教員が作成したCDを聴かせながら、発声・音高・産字を意識した練習をさせる。
- 3 時間目・・・能の特徴を生かした表現を工夫させ、思いや意図を感じて謡えるように導き、謡に対する関心・意欲の向上をはかる。  
→前時のグループ発表をさせる。まとめとして、能の紹介文を作成させる。

## (2) 成果

生徒にとっては、「能」＝「動きが遅い」というイメージが強かったが、ツヨ吟とヨワ吟を続けて鑑賞し比較させることにより、場面によって動きに緩急の変化があり、キレを伴っていることなどに自ら気付くことができた。また、着目する構成要素を一つに絞ることで、シテ・ワキや地謡の存在などに気付き、深く掘り下げた発表を行うことができた。

また謡曲の練習においては、発声だけに注意を向けさせるのではなく、息をできるだけ沢山使わせることを特に意識させ、場面を思い浮かべながら、強弱やテンポの緩急をつけて謡わせることができた。

生徒たちが実際に謡曲に挑戦することで、能に意欲的に取り組むことができ、多様な文化や音楽に触れる興味を引き出すことができた。見よう見まねでも良いので表現しようとするのが、鑑賞だけでは得られない大きな効果を生み出すと考えられた。

### (3) 課題

鑑賞・技能・表現において、沢山伝えたいことはあるが、中学生として、どこまでを目指すのかを、生徒にも分かりやすく示す必要がある。それが評価の明確化にも繋がる重要なことだと考えられる。また、ゲストティーチャーを招く際は、学習の意図を共有していただくために、十分な打ち合わせが必要である。

今後も、教材選びやライブ鑑賞の適切な導入時期に関する事、評価規準設定や方法などについて、教員側の研修がまだまだ必要である。しかし今回の授業研究の成果により、恐れずに一步踏み出すことが重要なことだと考えられる。

## 2 グループ協議

「基礎的・基本的な知識及び技能を効果的に習得させる授業改善」というテーマのもと、参加者を6グループに分け、討議・発表を行った。内容については以下のとおりである。

- 和楽器などでは、どこまでを基礎基本とするか、教員がしっかりと規準を持たなくてはいけないので、日々研鑽の必要性を感じる。
- 35時間という限られた時間のなかで技能を習得させるには、和楽器を含む楽器の練習時間を帯取りで行うことで、効果が得られる。
- 鑑賞においては、1年生で要素を感じ取らせ、2年生で知識を広げ、3年生で歴史的背景と関連させて聴かせるなど、3年間を視野に入れての積み重ねが重要である。
- 教員がしっかりと実演し、生徒が実感する授業にしていく。生徒に基礎的な技能を定着させるために、指導を工夫していく必要がある。毎時間必ず行う課題があることで基礎力の定着につながる。少しずつ積み重ねていくことが大切である。
- 生徒のつぶやきを拾い上げ、そこから発展につながるよう、より中身を充実させた授業が求められ、教師の力が試されていく。
- 実技は成果を実感しやすい反面、知識の定着が難しい。教員が意識的に音楽用語を使い、生徒の感想文によく見られる間違いを正すことにより、定着させていきたい。

## 3 助言・まとめ

学習指導要領の改訂により、我が国の伝統的な歌唱について、今までよりも踏み込んだ内容となり、新たな取り組みが求められてきた。今回の授業研究では、生徒たちの感想文の中に今後の授業への指針となる多くのヒントを読み取ることができた。これからの展望が開けることになる貴重なものとなった。発声の上手な子を育てることに腐心するのではなく、伝統的音楽への興味関心の扉を開かせることが大切である。授業において文化に向き合うきっかけを作り育成することが、将来的な興味関心の持続に繋がると考える。

ゲストティーチャーを招く環境になくても、求める気持ちさえあれば多くの資料が流通しているの、それを上手く活用し実践することが大切である。そして何よりも、生徒にしっかりと着眼点を示すことで、生徒自らが多くのことを学べると実感した。